

# 高知県における農業の現状と再生案

## ～若者に着目した農業再生策の提案～

1120413 吉田 誠

高知工科大学マネジメント学部

### 1-1. 概要

現在、農業従事者の減少と一次産業の衰退が高知県だけでなく、日本全体で問題視されるようになってきた。これに対して、政府や地方自治体などでは農業の衰退を食い止めるべく対策が講じられているが、解決に至っていない。そこで、本研究では、農業を続けていく上での問題点を明らかにすることで、若手就農者の農業離れの解消策を提案した。その結果、農業を再生させるためには若手就農者を農業に回帰させる必要がある。そのためには、農業の魅力向上と偏見の解消が欠かせない。

### 1-2. 背景

現在、耕作放棄地の増加問題が深刻化している。高知県の農地の耕作放棄地の推移を見てみると、1990年から1992年にかけて約1.3倍増加しており、その中で水田の放棄地は1.5倍に急増している。このように、耕作放棄地が増加していることは、県内の主要な産業が農業である高知県にとって、県政への影響は大きく、早急の対策が求められている。

この耕作放棄地が増加している理由として、農業従事者の減少が挙げられる。

国勢調査によると、農業従事者数は1980年は約21万人であったのに対し、2005年は11万人弱と約48%減少している。

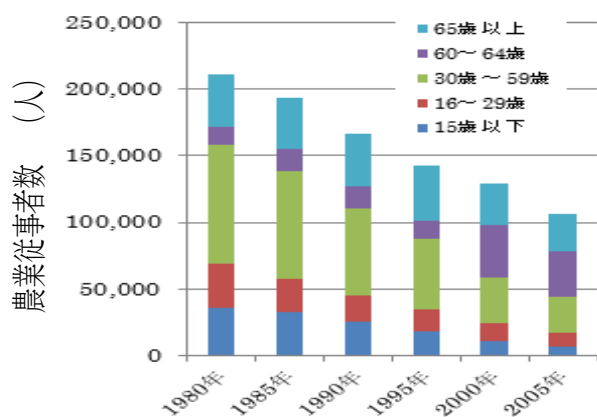


図 1-1 年齢層別の農業従事者数の推移

その内訳を見ると、59歳以下の農業従事者の割合は1980年には全農業従事者の約76%を占めていたのに対し、2005年

では約41%となっている(図1-1)。

このように、一次産業(農業)の衰退は、若手就農者が減少していることが一つの原因と考えられ、この若手就農者を農業へと戻す効果的な対策が必要である。

### 3. 目的

本研究は、高知県の農業の現状を調査し、若者が農業を目指すとともに、継続して農業を営む方策を提案する。

### 4. 研究方法

本研究は、はじめに、高知県統計書や農業に関わる文献より、高知県の農業の現状及び問題点を整理する。同時に、既往アンケート調査より、農家全体の農業就業意識を整理する。次に、高知県の町在住のショウガ農家を対象として、農家に生活状況や農業について思うことに関するヒアリング調査を実施するとともに、筆者自身、実際に農業を体験することで農業を知る。最後に、ヒアリング調査から、農業をしたくない理由、農業を継続する理由を意識の認知マップ化手法により整理して、若手が農業を目指す方策について検討する。

### 5. 結果

#### 5-1 農業に対する意識調査結果

農業に対する意識について、非農業従事者(6名)、農業従事者(4名)を対象にヒアリング調査を実施した。

#### 5-2 一般家庭(非農業従事者)からの視点

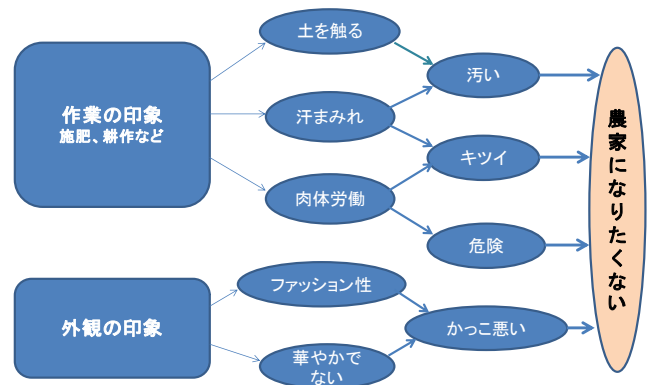


図 5-1 非農業従事者が農業に対する意識マップ

## 平成 23 年度マネジメント学部卒業論文要旨

非農業従事者の農業に対するイメージは、ネガティブなイメージがかなり強いことが判明した。そこで、出ていた意見としては、汚い、きつい、危険、くさいなどのいわゆる 4K が定着しており、肉体労働に対しての嫌悪感が強い。また若いうちからまったく遊ぶ時間がない、収入が少なく生活が苦しいという私生活が充実できないイメージが濃いため、農業を敬遠するといった意見が多かった。

### 5-3 農家（農業従事者）からの視点

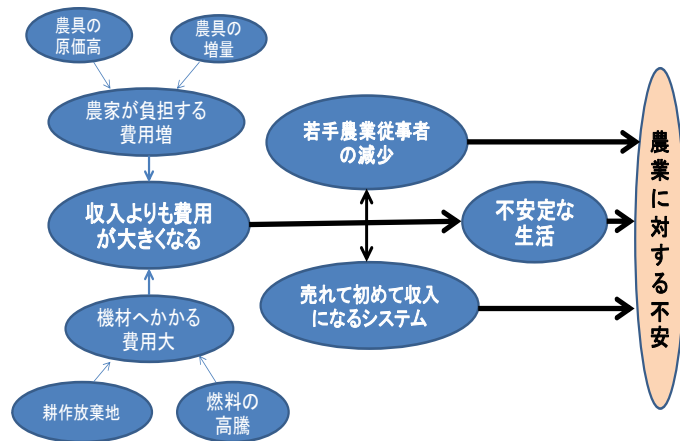


図 5-2 農業従事者が現在の農業に対する意識マップ

農業従事者側の意見としては、将来に対する不安感を強く意識している結果となった。自分の子供や身内に農業をさせたくない理由があると答えた農家がいたが、その心境として、この数年、収入が減少し続けていること、生活はやっていけないことはないがやはりしんどいものがある、外に出ていい職に就いてもらいたいという親の心理の 3 点が働いていることが判明した。また、耕作放棄地を解消する目的で営農規模を大きくする場合、耕作にかかる諸費用も比例して大きくなるため、収入が減少してしまう。このため、この苦勞を知っている親は子供に対して、「農業はやめておけ」と言っている事例もあった。

### 5-4 農業に対するイメージのまとめ

農業従事者及び非農業従事者を対象としたヒアリング調査から、農業に対するマイナスイメージについては比較的一致していることが分かる。しかし、非農業従事者は、農業に対する知識は、主として風評やメディアからの情報でしかないため、固定観念や収入面での不安感が高い結果となっている。

これに対して、今回ヒアリングした農業従事者は、親の代から継続して農業を行っており、親に辞めておけと言われて

も農家を継ぐ場合が多いのも事実である。実際にヒアリングした全ての農業従事者は、親と同じ仕事をすることで親の素晴らしさや偉大さを知ることが出来ると感じていた。

## 6 対策と提案

5 章で分析した農業に対する意識分析結果より、若手が農業を目指す方策について検討した。

### 就農者に対する魅力度の向上

5-3 で示された農業従事者が感じる不安を解消するためには、以下の方策が提案できる。

- ・農業に対する社会的評価や農業未体験者への保障などの支援
- ・地産地消のさらなる拡大
- ・農具に対して永続的な補助の継続
- ・環境に配慮した新エネルギー（木質バイオマス）の導入
- ・環境を売りにした野菜の販売（CO2 ゼロ野菜）
- ・若者との繋がりが重視した地域づくり

### 農業に対する偏見の解消

私は、まず農業の良さも悪さも知ってもらうために農家の方に様々な形でディスカッションを学生としてもらおうかと考えている。

高知工科大学の講義にある地域共生概論にて農家を招待し、一方的に話をするだけでなく、学生を交えてのディスカッションにて若者が持つ農業のネガティブイメージを払しょくし、農業の持つ 4K を軽減することを目的とする。

また、大学のポータルサイトのアルバイト募集要項の欄に農業の収穫の手伝いを追加する。こちらに関しては地域一体型で大学と農家、さらに地域貢献や社会学習などのメリットもあるため非常に有効であり、かつシンプルな活動と言える。

## 7 今後の課題

- ・就農者が農業を継続して出来る方策の提案する
- ・活動範囲を広め、農家との繋がりをもっと広める必要がある

## 8 参考文献 協力者

就農調査研究事業報告書 平成 19 年度

いの町枝川在住 農家様方